

野郎評判記『姿記評林』『雨夜三盃機嫌』における和語の漢字表記

藤井涼子

一 はじめに

近世前期における漢字の用法の実態を明らかにする目的で、前稿^①を受けて、野郎評判記『雨夜三盃機嫌』（元禄六）『姿記評林』（元禄十三）の狂詩をとりあげる。次にその例を示す。

桐、為勘當箱第一 きりはかんどうばことなるだいいち

波、袖運盡泣浮扨 そでをひたすうんつくがなんださかづきに

うかぶ

千年御座馴染洛 せんねんもござれなじみのみやこ

壽、露金露弧露離 いのちはつゆかねもつゆころり

（『姿記評林』霧浪千壽）

平仄に関わらず、役者名を詠みこみ、「うんつく」「すかんびん」等の俗語、音象徴語をとりこむという、かなり娛樂色の強いもので

あるが、こうした語を詩中にとりこむ際に新たな漢字の用法がとられることを予想し、二字以上の漢字連続と和語の関係を、漢字表記という視点からとらえていく。以下傍点は役者名の漢字を示す。

二 表記の分類

対象とした表記の中には、役者名の一字を詠み込むために「忝」から「忝」に字形を変えるもの、「竹、離（まがき）」「木、公（まつ）」のように一字を分解するものが見られるが、既存の漢字を用いた表記を考察の対象とし、前稿と同じく字訓用法、熟字訓用法、借義用法、借音用法、借訓用法の五種に表記を分類する。中には、「下使」のように借音用法でありながら、和語の意義と多少とも関わりのある字義の漢字を用いる表記、「野夫」のように熟字訓用法でありながら、語形を示すことを意図した表記もあるが、こうしたものにつ

いては、借音用法、熟字訓用法の中で取り扱うことにする。
以下、各用法別にその表記の特徴を見る。

三 字訓用法

(三・1) 用字面から見た字訓用法の特徴

ここで言う字訓とは「字義の翻訳にあたる日本語の音形態」であり、「文脈を離れた単体としての個々の漢字に固定的に結びついたもの」^②と考える。字訓としての固定度は、近世の漢字使用の実態が体系的に明らかにされていない今、判断には困難な面が予想されるが、本稿では、先行辞書である『類聚名義抄』『色葉字類抄』、室町期の『和玉篇』、節用集類への有無を一つの目安とする。

今回対象とした表記全体に各用法が占める割合を見ると、字訓用法がおよそ六五%と最も多い。しかも、その多くは現代の字訓に連続するものである。これは本資料における漢字表記の第一の特徴と言ってよい。

しかし、一方でこうした先行辞書収録の語彙と実際使用の語彙がくいちがう事は指摘されるとおりで、次の二例のように漢字の使用頻度、字訓としての定着度が低い表記も見られる。

例① 笑頰（あがほ） 『玉篇略』に「頰へい かほ」

例② 颯（なぶりころす） 『玉篇略』に「颯シヤク ころす」

二例とも今回調査した先行辞書の中では、『玉篇略』以外には見られず、本資料においても、右表記は一例のみで「貌カバ、顔カハ、面カハ、妍カハ」、「誅シヤク、死シ」が異表記として用いられる。また同時期の表記例を西鶴の浮世草子に求めると、「かほ」には「貞」が多用される。こうした点から、『玉篇略』の記述は字訓を示すものではなく、字義の解説にとどまるように考える。

次に先行辞書に収録されない表記をあげる。

【表1】先行辞書に見られない表記】「一」：本資料中の異表記

名詞：大踰オホトビ 零嬰シロエ 駕昇カノボリ 辻駕ツジカ 門入カドノイリ 蔵明クラノアケ 倉開クラノヒラ 下櫛シノヘ

手輶テノリ 尤豊モトトヨク 然櫛シノヘ

動詞：相囑あひらみけら 挖生むきいひます 震掄ふるいづく 卷逗まきとむ

この中には「駕昇カノボリ、門入カドノイリ、蔵明クラノアケ、尤豊モトトヨク」等の近世語が含まれ、その表記にあたる「駕カ」「豊トヨク」は近世の資料には用例が認められる。いわば近世的な字訓である。又「門カド」「明アケ」は「かど」「あける、あかす」が既に字訓として定着しており、ここでの表記は臨時的な性格をもつ借義用法と見た方がよさそうである。

しかし他の例については、先の二例と同様に漢字の使用頻度、字訓としての定着度、実用性は低いことが予想される。その一例として「然櫛シノヘ」の表記の事情を見てみたい。

「もえくいは、原義は「燃えさしの木」であるが、転義として

「かつて関係があつてまたその状態にもどりやすいもの、とくに男女の關係」を表わす。先行辞書の表記は次のとおりで、原義に等しい意義の漢字、漢語を用いる。

例③ 燼 モンケヒ 火餘木也 (「色葉字類抄」黒川本)

例④ モエクイ 餘燼 アノクモエクイ 器材門 (「文明本」「節用集」)

本資料では次のように転義で用いられる。

例⑤ 彌増然燼火宅源(いやましのもえくゝい、くはたくのみなもと) (「雨夜三盃機嫌」玉川三彌)

「然」は「若火之始然」(孟子・公上)とあり「燃」と同様に火が燃える状態を表わし、「燼」は根を切つたあとと切り株を表わして和語「くゝい」とほぼ類義である。和語「もえくゝい」を二要素に分け、等しい字義の漢字によって表わす表記である。

一方、浮世草子には「宵の燃杭」がして、たばこはしたなく吞ちらし(「好色一代女」四・二)。「臺所には白應の胸がら蝸汁の跡、燃杭に火とはこの人の昔しかへる(「好色一代男」二・六)のよ」に、原義、転義共に字訓用法による表記「燃杭」が用いられる。

先行字書の表記は転義で用いる場合は理解しにくく、浮世草子の表記はそういった欠点を補つたものであろう。しかし、本資料の表記「然燼」は、浮世草子と同じく「もえくゝい」を二要素に分けて表記しながらも一般的な表記を避けるのである。

こうした漢字の選択には、漢詩としての表現形式や役者名は規制として働いておらず、二字漢語として典拠のある語でもない。逆に、使用頻度、訓の定着度が低い漢字を選ぶことで二字漢語らしい外見を意図する、あるいは他に「羽袴」「小袖」「浮鯛」「稲舟」といった複数の表記が見られるところから、使用漢字の種類を増やし視覚的な効果を意図したもの等、いくつかの推測が可能である。しかし、その背後には日常使用の言葉とは異なる語感の漢字、漢語を志向する傾向があるように思う。

一般的な字訓による表記と共に、こうした字訓としての定着度が低い和語と漢字の組合せが用いられる点が本資料の表記の第二の特徴である。

(三・二) 意味分野から見た字訓用法の特徴

字訓用法によって表記される和語には、近世に入り、新たに生まれた語の表記例が多い。その例を次に示す。

【表2 字訓用法による近世語の表記】

一 遊里、芝居他、風俗に関する語

揚屋 <small>あげや</small>	大跟 <small>おほぞり</small>	大寄 <small>おほよせ</small>	駕泉 <small>かづみ</small>	勝山髪 <small>かつやまかみ</small>	門入 <small>かどいり</small>	蔵明 <small>くらみ</small>	倉開 <small>くらひら</small>	墨髯 <small>すみひげ</small>
付指 <small>つけさし</small>	出牀 <small>でしど</small>	床入 <small>とこいり</small>	巻鯛 <small>まきずり</small>	幕張 <small>まくはり</small>				

二 人の性格、資質、行為に関する語

通者とありもの 半通なかたより 抜作ぬけま 濡神ぬれがみ 濡者ぬれもの 張強はりつよ 鼻油はなあぶら 卷舌まじした 三指みつゆび
遺線でりく

これらは、いずれも既存の語を語構成要素とする新たな複合語であり、語構成要素の意義と語形を示す字訓用法の機能が生かされた例と言えよう。

四 熟字訓用法

(四・1) 用字面から見た熟字訓用法の特徴

熟字訓用法による表記を、中古末の通用の語を多く収録する『色葉字類抄』と比較し、本資料の表記、使用度数(二以上)、へに『色葉字類抄』の表記、一に本資料中の異表記の順に示す。

【表3】『色葉字類抄』と同語同表記のもの

名詞：明日あす 菖蒲あやめ 二月ふたつき 今宵このよ 五月ごつき 月盡つもどり (つごもり)「晦」

【注】 徒跣はだし 紅葉もみぢ 楓葉もみぢ 田舎いなか

動詞：跋扈ふんはたかる (ふみはだかる) 想像ぞもひやる 他ほか：去来いきき

※ 字訓用法と組合わせた表記 山郭公やまぼけ 田舎人いなかびと (ゐななかひと)

【表4】部分的に『色葉字類抄』の表記と対応するもの

名詞：雲髮かみ (髪かみ) 公侯きみ (公きみ) 事業しわざ (業わざ) 翠簾すたれ (簾すたれ)

動詞：契約ちぎる (契ちぎ) 約ちぎる (契ちぎ) 形容詞：久淹ひさし (久ひさ)

【表5】『色葉字類抄』と同語異表記のもの

名詞：太虚あふそら (空そら) 杜若かまつぼた (劇草げきそう) 容止かまはせ (顔かほ、面子めんし、顔面かほめん) 餘風なごりかぜ

(波なみ) 鞞丸みくろ (陰囊いんなん) 楓葉もみぢ (紅葉もみぢ、紅葉もみぢ)

形容詞：風流かぜりゅう (伶あしひ) (面白おもしろ) 娉婷なつめし (愛藝あいぎ、撫育ぶよく)

形容動詞：嬋娟なまやか (嬋媛なまよか)

※ 字訓用法と組合わせた表記 婀娜いみづめ (色いろ、彩いろど、采いろど、綵いろど)

【表6】表記される和語が『色葉字類抄』に収録されないもの

名詞：味爽あじくれ (旦暮いたる) 晚鐘いりあひ 粧鏡すたみ 玉章たまづま 流言つやあらい 艶粉つやあらい 薰籠かせこ

名詞：焦炭ほむら 山隱やまひ 行馬ゆかり 由緒ゆかり 所縁ゆかり

動詞：憔悴せせげ

※ 近世語の例 浮氣うわき 大會おほいせ (大寄おほいせ) 三絃しやみせん (三味しやみせん) 慈石はげすうし

風流やぶ 野夫やぶ (彌保やぶ)

熟字訓用法による表記例には、「大會、今宵」のように、表記される和語の一部と漢字連続中の一方の漢字が字訓を通して対応するもの(一線部)があるが、字訓用法と非字訓用法を組合わせたものというよりも、二字漢語をそのまま表記に利用し、和語と漢語の意義の共通部分が字訓による対応という形をとったものと見るべきであろう。ただし「徒跣」については「かちはだし」の訓もあり、そうした訓の省略形とも言える。

全体を概観して、字訓用法と同じく先行辞書の表記と共通するも

が多い。表5、6の中にも、他の先行辞書の表記、中世の和漢混淆文の表記と共通するものが見られる。また、明日、田舎、浮氣、今日、五月、紅葉など、現代の熟字訓表記に連続するものも見られる。しかし、その一方で通時的にも共時的にも他の用例が見つけないものがある。その中の一例「容止」を次にとりあげる。

(四・2)「容止(かほばせ)」について

本資料中の表記例は次の通りである。

例⑥ 菖蒲杜五月頃 あやめもかきつばたもさつきころ

君容止其迄餘風 きみのかほばせそれまでのなごり

〔姿記評林〕芳澤菖蒲

「容」については「頌、説文、兒也(中略)通作容」(『集韻』)とあり、その字義は「兒」と類義で「ある物を外から見た様子、状態」と考えられる。「止」については「停也 足也 禮也 息也」(『廣韻』)とあり、足の形を表わす象形文字であると同時に「禮の義も表わすとされる。「相鼠有齒 人而無止 人而無止 不死何侯」(『詩経・相鼠』)がその例である。「容」と「止」、こうした両字義から見て、「容止」の語義は「人が礼節を守る様、そうした行為」ととらえることができる。これを「容止」の第一義とする。次例は第一義で用いられる例である。

例⑧ 雷將發聲 有不戒其容止 生子不備 必有凶災

〔礼記・月令〕

第一義「容止」は規範に合致するかどうかという評価と共に用いられることが多いが、次に示す「容止」は、その上品さを称えられ例⑧よりも外見的なところに重点がおかれるようである。

例⑨ 華見其總角風流 潔白如玉 舉動容止 顧盼生姿 雅重之

〔搜神記〕卷十八

つまり「容」の字義に重点がうつり、「礼節を守る様」に限らず「全体的な人の外見、様子」を表わすようになったものであろう。これを「容止」の第二義とする。「容止」の表記はここから生じたものである。「容止」と和語の結びつきを見ると『類聚名義抄』で

は「容止(法下五十)」とし、『日本書記』北野本訓では「ミフルマヒ」「スガタ」「ミカホ」とする。訓「ミカホ」の例を次に示す。

例⑩ 皇子大津 天淳中原瀛真人天皇第三子也。容止墻岸音辭俊

朗。

〔日本書記〕卷三十 持統天皇

「容止」は動作も態度も含めた人物の外見を表わすが、右例はそうした外見を「顔で代表させた訓」なのである

しかし、その語義が和語「かほばせ」に比べて広く、他表記「顔」もあるためか、実際に表記に用いられる例は少ない。辞書には次の二例を確認した。

例⑮ 面カキ顔カキ 同 容止カキセ (易林本『節用集』)

例⑯ 顔カキセ 同 容止カキ (『書言字考節用集』)

また、例⑯では「顔カキセ」は肢體、氣形門に、「容止カキセ」は言辭門に収める。「顔カキセ」が一般的な表記であるのに対して、「容止カキセ」は文語的な表記としてうけとめられたのであろうか。

先の字訓用法にも、「然禱もよぶ」を始めとする、字義に忠実ではあるが実用性の低い表記が見られた。「容止カキセ」もそれと共通する。漢語の語義に忠実ではあるが、近世においては一般的な表記としては定着していない様子である。

(四・3) 意味分野から見た熟字訓用法の特徴

熟字訓用法によって表記される語の多くは自然界の事物を表わす和語の名詞であり、その語史は古い。近世語の表記例は「浮氣うわき」「大會おほいせ」「三絃しやみん」「野夫やほ」「風流やま」であるが、異表記も見られ、一表記に定着しているわけではない。字訓用法に比べて近世語の表記に果たす役割は小さいと言えよう。

五 借義用法

(五・一) 用字面から見た借義用法の特徴

漢字、漢語と和語の間に何らかの連想が生じ表記が成立するものであるが、連想の契機という観点から、表記を類似型と近接型に分する。単位の間では、漢字連続と和語全体が借義の関係にあるものと、「仕穰しじな」のように他用法と借義用法を組合せたものがある。以下にその用例を示す。

【表7】類似型の借義用法

(注||線部は語形を示すことも考慮された箇所を示す)
名詞：冬風あらし 艸離うきくま 和歌うた 虚気うつし / 空氣うつし 此方こなた 櫻花さくら 真似まね 高岡たかね
動詞：浮巖うか 動驚かびの
形容動詞：幼氣いたい (為長卿)

【表8】近接型の借義用法

《単独の借義用法》
名詞：河伯かほく
形容詞：浮雲あふぐも 難面つれなし 難面つれなし
他：閑思わんごころ 一事暮ひとごとく 思君草おもひこぐさ

《他用法との組合わせ》(注||線部は借義用法による表記を示す)
名詞：仕穰しじな「仕成」山観やまかん
近接型においては、両者の語義の関係は必然性が低く、個人的な解釈が加わるものもあり、「山観やまかん」をはじめ理解しにくい表記が多い。その一例として、「河伯かほく」「閑思わんごころ」を見てみたい。

「河伯」は「莊子・秋水」に「於是焉河伯欣然自喜、以天下之美為盡在己」とあり、伝説中の水神を表わす語である。一方「すっぽん」は『古今注、魚蟲』に「鼈名元衣督郵鼈名河伯從事」とあるとおり、河伯に仕え従うもので「河伯從事」と表記されるべき語である。ここでは語義の近接関係というよりも、支配者と従者という、語が指示する事物の近接関係から成立した表記である。

「闇思」「思君草」については「志不可起」（享保十二）の記述によると「生天成仏闇思君 燈下吟詩 瘦十分秋風不應拂 胸霧」といった漢詩中の表現から、一種自暴自棄の感情を表わす語「わざぐれ」の表記にあてられるようである。

両表記ともに漢語の知識を前提とした表記である。

借義用法は作者の独創性が強い表記のように思われるが、「冬風」(『万葉集』)「真似 マ子(易林本)『節用集』」「強顔 ツレナシ私云難面強面(『色葉字類抄』黒川本)」「浮雲アプトシ(易林本)『節用集』」「穰 こなす」(同)等の先行表記が認められる。他の表記については更に調査が必要であるが、「高岡みね」のように、役者名を詠み込む為の臨時的な表記も含まれるようである。

(五・二) 近世語「しこなし」の表記

表記される和語の意味分野については、語数も少なく、全体の傾

向としてはとらえにくい。その中の、近世語の表記例として「仕穰こな」をとりあげる。

「しこなし」は動詞「する」に補助動詞「こなす」が加わり、名詞化したものである。「こなす」の原義は「何かをより細かく砕くこと」であるが、砕く対象には「一」田畑や穀物、「二」仕事や課題、「三」他者の存在があり、第一義の「こなす」は農作業の意であるが、以下語義が抽象化し、第二義では「思いどおりにうまくこなす」といった熟練性、第三義は「散々に人をやりこめ、こなす」といった優位性、支配性が語義の中心となる。補助動詞としての用例は熟練性に基づくものである。

その漢字表記を室町期の節用集に見ると、第一義(田畑をこなす)と第三義(人をこなす)、それぞれの意義を示す表記が収録される。

例① 平懐コナス 第三義 穰コナス 第一義

(饅頭屋本)『節用集』

例② 穰コナス 第一義 農コナス 第一義 (易林本)『節用集』

例③ 罵コナス ヒトコナス 第三義 (伊京本)『節用集』

一方、近世語「こなす」「しこなし」は(1)遊里における遊び馴れた様、うまく座をとりしきる様、(2)役者の所作、とくに台詞によらず所作のみで十分に演ずる様を表わすのに用いられる。(1)に

おいては遊里の状況、(2)においては役柄をよく理解して「思うがままに、うまくやりこなす」という熟練性が意義の中心となる用法である。

本資料の用例は次のとおりである。

例⑭ 少将仕成有分茵 しゃやうしやうがしこなし わけあるしと
ぬ

〔「姿記評林」大磯吟〕

例⑮ 龍勢仕穰如得水 りやうのいきほひあつて しこなしみづ
をうるがごとし

〔「姿記評林」水木龍之助 七化狂詩〕

例⑭は遊里語の「しこなし」で、例⑮は芝居語の「しこなし」である。例⑮の「穰」は『小爾雅・廣物』に「把謂之秉、秉四日筥、筥十日穰」とあり、稲の束を指すことから第一義の「こなす」の表記に用いられるもので、本来の字義から外れた近接型の借義用法である。又、表記の示す意義は第一義であり、芝居語「しこなし」の意義とは異なる。このように近世語「しこなす」は「こなす」の原義から大きく変化した為、その意義に対応する漢字表記がないままに様々な表記が成されるようである。次に同時期の他評判記の例を示す。

例⑯ 時花哥 責賦なんといふ物を其ま四行として初心、初會
の客の指南車とす。是、仕平懐たる帥のためにあらず

野郎評判記『姿記評林』『雨夜三盃機嫌』における和語の漢字表記

〔「蓑張草」〕

遊里語「こなす」に人をこなす義の「平懐」をあてる例で、こうした近世語の語義を示す表記の難しさが見てとれる。浮世草子にも「こなす」「しこなす」の用例は多いが、仮名表記が主である。

六 借音用法、借訓用法

(六・一) 用字面から見た借音用法、借訓用法の特徴

【表9・単独の借音用法】

名詞：三味^{北み}？「三絃」^{しゆみだん} 左禮^{ざれ}？ 多磨^{たま} 和氣^{わけ}

動詞：下使^{くだし}

形容詞：右流左^{うるざし}

形容動詞：香茶^{まろち}

副詞：者本^{しやほん}？ 兎角^{とかく} 滅太^{めつた}

※ 完全な語形を示さないもの

【表10・単独の借訓用法】

名詞：曲輪^{まがわ} 竹葉^{たけのえ} 田鶴^{たづ}

形容詞：面白^{おもしろ}？

副詞：平天^{ひらてん}

他：天晴^{あはれ}？ 吉由^{よよし}

注||線は語意を示す事をも考慮された箇所を示す

本資料の借音、借訓用法の特徴として、漢字の音形態の借り方が多様化している点があげられる。固定した字訓を借りるだけでなく、「曲輪」のように、「曲輪曲輪」「曲輪」から字訓として定着していない音形態「くる」を借りるもの、「竹葉」のように、熟字訓によって得られる音形態を借り「酒」の義を表わすもの、「鳥乎籠」のように、助詞「かや」の音形態を借りるものがある。

また第二の特徴として「宵焼 尤豊 村雲 村雨³ 村麩 嘸 物食 手管 域張」のように、他用法と借訓用法(傍線部)、借音用法(ク)と他用法を組み合わせたものが多いことがあげられる。音象徴語の表記とは異なり、一般の和語においては意義を捨象し語形のみを示す表記は成されにくいことを示すものである。

ここに用いられる表記の多くは先行辞書には収録されないが、「下室」「發南」「満件羅」は「増補下学集」(一六六九)の末尾、「国華合記集」からの転写部分に見られ、「右流左」は中世の説話集『江談抄』及び虎明本狂言に表記の由来が語られ、節用集にも「右流左死(黒本本)」「右流左止 見天神縁起也(文明本)」とされる。まさに、様々な背景をもつ表記がここに取り込まれるのである。

(六・2) 意味分野から見た借音用法、借訓用法の特徴
表記される語には、次のような近世語が見られる。

《単独表記》 曲輪、三味、左禮、和氣、者本
《他用法と組合わせた表記》 嘸物食、域張²、否物好³

木野夫²、仕成、仕穰、不好貧、彌保、事暮橋、慍(慍)目、晒臭、坪入、尤豊、闇沫赭

字訓用法によって表記される近世語との違いは、「すかんぴん」「やみりみっちゃ」のように、俗語的な性格をもち、語構成が明らかでないものが多い点である。こうした語には、意義と語形を示す字訓用法の表記は適さない。

また「わけ」「やほ」「いき」は、近世特有の価値観を表わし、使用頻度が高い語である。表記に関しても、他資料に「野放」「反故集」「屋暮天」「夜暮」「白増譜言経」「野慕天」「史林残花」等の異表記が見られ、多様な表記の工夫を競う傾向があるようである。借音、借訓用法が、こうした一種の流行語の表記に果たす役割は大きいと言える。

七 おわりに

本稿では、狂詩中の和語の漢字表記を各用法別に、用字面と表記される和語の意味分野の二点から観察した。

熟字訓用法、字訓用法は、通時的には先行表記を受けつぎ、さらに現代の表記に連続するものが多い。しかし一方で「然禱(もえく

い)「容止(かほばせ)」のように、漢字漢語の意義には忠実であるが、近世における一般的な表記とは異なるものがある。

借義用法においても、「難面(つれなし)」「浮雲(あぶなし)」のように、先行表記を受けつぎ広く用いられるものがある一方で「河伯(すっぱん)」のように、漢語としての典拠、用例は認められるものの、和語「すっぱん」の表記としては他に用例が見つけにくいものがある。また、臨時的な表記、意義のつながりが説明しにくい表記もここには含まれ、その性格は多岐にわたる。

借音、借訓用法については、他用法とくみあわせ、熟字訓用法、借義用法によって得られる音形態をも借りる点が特徴的である。これは前に見た音象徴語の表記にも共通する。

以上、本資料には漢字、漢語の意義を尊重し先行表記に倣う表記と、漢字の音、訓、義を自由に用いる新しい表記が混在する。これは初期の野郎評判記にはない特徴であり、極端な場合には、前者は術学的、後者は遊戯的な表記ともとらえられる。

こうした二種の漢字の用法の共存は、漢文の表現を用いながら、内容においてはそれをもじり、パロディにしてみよう戯漢文のありかたにも通じる近世の表記の特徴と思われるが、今後、調査の幅、量を増やしたなかで追究していきたい。

注

- ① 「野郎評判記『姿記評林』における音象徴語の漢字表記」(同志社国文学 四十号) 一九九四年・三月)
- ② 『国語学大辞典』(明治書院)「訓」の項
- ③ 山田俊雄「近世の常用漢字について」(言語生活 三七八) 昭五八・六月)
- ④ 山田俊雄「近世常用の漢字」『冠附かざし草』の用字―(成城国文学論集十六) 昭五九・六月)
- ⑤ 「物の正中をまっふくらナド云モ豊字也」(「志不可起」)
- ⑥ 「杜若」(「類聚名義抄」僧上四十七)「嬋娟」(同 佛中十二)「晚鐘」(「玉札」玉章)「想像」(饅頭屋本「節用集」)
- ⑦ 山田俊雄「熱田本平家物語の漢字とその用法の一側面」(成城国文学 昭三十一・十二月)
- ⑧ 『日本古典文学大系 日本書紀』(岩波書店) 頭注
- ⑨ 池上嘉彦「意味論」(大修館書店 二二六、一三九頁)
- ⑩ 「覲」は「覲、望也(小爾雅・廣言)」とあり、下の者が上に対して乞い願う意を表わす。その結果として得られる上からの恩恵が山頂から吹き下ろす風を連想されるか、と考えるが明らかではない。調査対象のうち、「安託」「右行」「左行」「小篇」は借義用法の可能性が高いが、表記のしくみが確定できず分類を保留する。
- ⑪ 「發南 花也、下室 葦也、満件羅 枕也」(『増補国華集』京都大学付属図書館蔵 一六九二)
- ⑫ 蜂谷清人「狂言『右流左死』の題名と表記」(『狂言台本の国語学的研究』笠間書店)

使用したテキストは次のとおりである。

- 「雨夜三盃機嫌」「姿記評林」「襄張草」「歌舞伎評判記集成一、二」(岩波書店)、『国寶北野日本書紀』(貴重圖書複製會)、『好色一代女』
「好色」代男』、『定本西鶴全集一、二』(中央公論社)、『志不可起・近世
文学資料類聚七』、『反故集・近世文学資料類聚四七』(勉誠社)、『白増譜
言経』、『史林残花』、『兩巴「卮言」』、『洒落本大成一』(中央公論社)、正宗敦
夫『類聚名義抄』(風間書房)、中田祝夫『色葉字類抄』研究並びに総合
索引(シ)、中田祝夫『古本節用集六種研究並びに総合索引』(シ)、中
田祝夫『文明本節用集研究並びに総合索引』(桜楓社)、中田祝夫・小林
祥次郎『書言字考節用集研究並びに総合索引』(風間書房)、北恭昭『倭
玉篇五本和訓集成』(汲古書院)、『大宋重修広韻』(中文出版社)、『廣韻』
(シ)、『詩経』新釈漢文大系(明治書院)、『搜神記』叢書集成新編八
一』(新文豊出版公司)、『古今注』増訂漢魏叢書四』(大化書局)、『小爾
雅』、『和刻本辭書字典集成卷一』(汲古書院)